

2023年 夏季福音特別集会 第1回 主キリストの賜う『信』に生きる

2023年8月25日（京都KKRくに荘）

奥田 昌道

伝道50年・信仰66年 牧師集団と一般庶民の間のギャップ 二足草鞋の二刀流 樹木と根つこの話 奥田無きあと京都キリスト召団はどのようにして立つて行くのか 聖霊のバプテスマ 四つの警戒すべきもの、観念信仰・パリサイ・霊的傲慢・御利益 人間は肉体的存在であると同時に霊的存在 外なる人は壊れるけれども われ主と共に十字架せられたり 詩篇103篇と139篇 祈り

●伝道50年・信仰66年

今、司会者が語ってくれたことは、本当に私の思いを見事に表現してくださっていると思います。自分でも不思議に思うんですよ。私は1932年生まれ〔1932/9/28生〕で、信仰に導かれたのが24歳の時ですから、66年になります。伝道は50年。伝道者として独立したのが1972年のお正月ですから——まだ39歳でしたけれども——まあ40歳から現在に至るまで50年やっています。だから、50年というのは、口で言うのは簡単だけれども、本当に長い期間だということが言えると思います。

その間、私の本来の職業は——「本来」なんていうと変な言い方ですけども——職業は京都大学の民法講座の担当者、教授としてそちらの方の教育・研究に携わってきた。それはそれだけでも本当はしんどいですよ。それだけでしんどい人間が、何をまた好きこのんで福音伝道というものに一歩を踏み込んだのか。

考えてみたら、やはりそれまでのキリスト教会——私はそんなに多くの教会をのぞいてはいませんが——私が関与したのは、始めの方はフィンランド系の教会、その後はスウェーデンの教会でした。日本独自の教会というのは、実はあまりのぞいていない。日本キリスト教団——「日キ」と言ってますね——そういう所にちょっと首をつっこんだこともありましたが、そういう従来のキリスト教というものに、どうも違和感を感じて仕方がなかった。そんな時に出会ったのが小池辰雄先生だった。小池先生のお話を聞いて、

「これが本当だ。これが日本に根を下ろした本当の福音である」

という確信をいただきました。それは1959年の秋——ちょうど京都大学でドイツ文学会が開かれて、それにおいでになったと伺っています——その機会に小さな家庭集会的な所で一晚、先生にお話いただいた。それから翌日は楽友会館の大きな講堂で伝道講演会〔1959/1/9夜「無的実存」(マルコ10・17〜22)をされた。その司会を私がさせていただいた。た



くさんの人が集まってくださって、その帰りがけに、あるご婦人が、
「私はお茶を売っている人間です。でも、今日のようなお話は本当に感動でした!」
と言って、すごく喜んでおられた。そのことが非常に私は印象に残っています。

というのは、先生のお話というのは、いわゆる宗教学者、宗教家らしくない。本当に普通の人間が、まるでキリストに出会って変質変貌したような姿で、しかも自由自在にあつちへ歩いたりこつちへ歩いたり、まさにさ迷える姿で自由自在にお話なさっている。それが実に愉快な姿だったので、あれは本当に私にとって強烈な印象を与えました。

その年のクリスマスに東京へお伺いし、お招きにあずかって、先生と親しく一晚過ごさせていただいた。その時に戴いた本が『主の祈り』という本だった(『聖意体現』―主の祈り―1959/12/20発行)。それが1959年でした。

その翌々年に先生はドイツへ交換教授としていらっしやいました(1961/4～1962/3)。私は先生がお帰りになるような頃に、ドイツへ行つたんですけれども(ケルン大学の研究員)、私をお迎えくださって、アルスター湖なんかと一緒にボートに乗ったりして非常に楽しい時を過ごしました(1961/8/31)。それは『曠野の愛』誌という雑誌にちゃんと写真入りで載っております(『曠野の愛』第36号1961年晩秋号)。

そんなことで、私は小池先生を通して、いわゆる宗教家らしくない福音、日本に根付くべき福音、そういうものに初めて触れた。どうしてもそれまでは、バター臭いというか、ヨーロッパから輸入されたキリスト教しか知りませんでした。やはり日本には仏教や神道の伝統があります。宗教的な土壌においては非常に深いものを持つているにもかかわらず、アメリカ、或いはその他の外国からきた宣教師たちはそれに対する理解がほぼない。そのことに対して私は大変いわば憤りを感じておりました。やはり、日本への伝道は日本人でなければできないと、そういうふうにある種の確信みたいな、そういう思いを抱きました。

しかし、思いとは別に、やはり自分の職業からしても、これは片手間でできることではありません。それから、大学紛争だとか、いろいろ厄介な問題もかかえておりましたので、法学部に奉職している人間は本当に大変だったことは確かです。しかしながら、火を付けてくださったのは小池先生だった。私の願いは、やはり大和魂をもって日本に本当の福音を伝えたいことでした。そういう気持ちで非常に強く沸き上がりました。

幸い、妻がよき理解者であったものですから、まずは家庭集会からということ、家庭を解放して、そこで小さな集会を始めました。特にその頃は日曜日だけではなくて、水曜日にも祈祷会というのをやりました。その時には小池先生のテープを聞いて、一緒に祈る。法律学者でしかない人間が、合わせてそういった日本への伝道を志すという目的への火付け役をしてくださったのが小池先生だったと思います。及ばずながら、そういうことをやり出した。最初は市川先生と一緒にやっていたけれども、小池先生が、

「やはり、二人はそれぞれ特質がある。その特質をお互いに生かしあうためには、



別々の路を歩んだ方がいいよ」

と言われた。それで、40歳になる年から私は今までお世話になった市川喜一先生の群れから離れて、妻と二人で新しいスタートを切ったというのが1972年だった。73年に、小池先生の所はそれまで「武蔵野幕屋」という呼び名で集会をやっておられたのが、「東京キリスト召団」という名前を名乗られた。それだったら、

「京都の方もさかのぼって、72年から「京都キリスト召団」ということにさせてもらってよろしいでしょうか？」

とお伺いしたら、

「ああ、いいよ」

と言われた。だから、京都キリスト召団は1972年からスタートした。ちょうど私が40歳になる年です、9月生まれですから。スタートしたのは正月ですから、正確には39歳ですけれども、その時に妻と二人で始めたということになります。

● 牧師集団と一般庶民の間のギャップ

それから、一点、私がやはり申し上げたかったことは何かというと、福音というものは特別な人間だけのものであつてはならないということです。人間は肉体をもつて生きています。肉体は、食物とかいろいろ自然的な肉体を養ってくれるものがなければ、維持することはできません。しかし同時に、人間は霊というものを載っています。私の考えでは霊と心と体からだがある。心は霊と体を繋いでくれるものだと私は思う。

「心はどこにある？ ハート？ ハートというのは心臓？ 心臓に心はあるの？」

と。そんなことはわかりませんよね。けれどもやっぱり何か、心というと心臓を思うようなことはありません。そういう心というもの、霊というものは、誰も見えない。霊は自分自身でもわからない。体は見えるものです。見えない霊というものと、体という見えるもの、その二つを接ぎ合わせてくれているものが心というものではないか。心もよくわからないが、何かそういう気がするんです。実は、神さまが語りかけておられる相手は霊なんです。体ではない。雷とか雨とか、そういう自然現象は体にきます。けれども、神さまが語りかけられるのは霊なんです、霊に対してです。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもつて拝すべきである」

と、ヨハネ伝に出ています。これはサマリヤの女に仰った言葉だったと思う。そういった霊と真をもつてする礼拝、そういうことを人間はやるべき存在なんです。ところが、それについては誰か導き手がいないと、誰もがひとりでにそういったことができるわけではない。肉体を持った人間が同時に霊なる神さまと結びついて、そして自足的に成長していくというのはなかなか難しいだろうということ、特にそのために召された方々が伝道者とか牧師というグループではないだろうかと、私は思う。



でも同時に、そういった神の御言みことばを伝える専門家集団ができてしまって、その専門家集団と我々俗っぽい普通の俗人の間にギャップができてしまつては困る。別な言葉でいいますと、言葉を語る人が庶民の苦しみとか辛さ、嘆き、呻き、それを本當にわかつてくれている人が神の御言を伝えて、初めて胸を打つ。そうでなくて、別の集団を作つて、そこで専ら神に仕えているということは、尊いかもしいないけれども、一般庶民との間にギャップが生じるのではないだろうか。そんなふうに私は思った。

人間は肉体的存在であると同時に、霊を持った存在として神さまはお創つくりくださった。神さまは肉体にも働きかけられるけれども、直接には霊に対して語りかけてくださる。けれども、我々凡人は日頃いろんなことにかまけて、肉体を養うのに精一杯だから、霊に対して神さまが語りかけてくださることに耳を傾けて、それをキャッチすることはなかなか難しいだろう。そういうことで、何か特別に選ばれた方々が、神に仕える方々として牧師とか、伝道者という職業を天職としてお就きになつていないだろうかというふうに思った。

しかし、えてして今度は牧師学校とか、伝道者養成学校という別なものができてしまうと、一般庶民とはまたそこに断絶が起こる。これでは当初の目的とは違うようなことになつて、いわゆる専門家集団対俗人という対立になつてしまう。ということは何かというと、俗人でありながら同時に神さまの一番深いところまで究めさせていただく——いや神さまの方が究めさせてくださる——そういう在り方が人間として本来ではないかということを思った。つまり、人間は肉体的存在であると同時に、霊的存在である。神さまが語りかけられるのは、霊に対して語りかけておられる。肉体にも働きかけて、健やかにしたりいろいろよいことをしてくださるけれども、やつぱり、

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもつて拝すべきである」

とキリストが言われたように、そういった霊を持った人間に対して、霊なる神さまは語りかけられる。それをすべての人が、それゆえに的確にキャッチする、それが本来望ましい。普通の職業に従事して普通の生活をしている人と、別にグループができて、こっちは専ら神さまのことを取り扱う職業集団、こっちは俗っぽい社会の中で汗水たらして、コツコツと——まあ取るにたらないとは申しませんが——それに近いことに汲々としている。そういう衆生を救うために神に仕える特別なエリート集団ができる。こういう形になつたら、これは全く私は違ふと思うんですね。小池先生は、

「人間は本来、宗教人である。宗教というのは「レリギオ」(religio)といつて、本来神さまと繋がっているのを、それが切断されている。それを結び直す、「再結」、再び結ぶという。本来、宗教というのは再結ということだ。本来的には一つであるべきものがバラバラとなったから、それをもう一度結び直すという、そこから「レリギオン」(religion 宗教)ということになった」



というようなことをお話になった。ということは、特別な宗教集団は本来、在る必要はない。ない方がいい。我々、普通に俗人といわれている者たちが生活の中で必死になって神さまを求め、神さまに助けられ、そこでつかんだ者がそれぞれ告白して集まって祈り合うという集会だけで本来、十分なはずなんです。

ところが、どうも我々俗人は毎日の生活のことで精一杯で、日曜日に集まって何かいいものを持ち寄って、

「まあ、ここで神さまの御言を受けましょう」

と言ったって、そういう音頭をとる人間も現れないでしょ。だから、やむを得ず、何かある集団ができて、それが神の御言を扱う集団になる。片一方は、六日間働いて七日日には教会にやって来て、御言を聞くという、そういう分離が起こった。私は、そういう分離というのは本来あるべきではないと思う。決して、本来的には神のキリストの側の御意ではないと、そういうふうには私は思うに至りました。

誠に恐れ多くも、40歳になった時に、小池先生のお励ましもあって、それまでの群れから離れて、自分で新しいキリスト道を探求し始めました。やはり小池先生の存在は絶大です。先生のお書きになったものは全部読みました。録音なんかほとんど聴きました。

そういうふうにして、私の福音の中味を形成してくださったのは小池キリスト道なんです。先生は「キリスト教」とは仰らない。

「キリスト教ではない。キリスト道である。日本は昔から道の民である。剣道、柔道という。柔術とは言わない、柔道だ。剣術とは言わない、剣道だ。道というのが貫いている」

というようにも仰いました。そういう先生の理念にも私は非常に共感を覚えました。

だから、そこから出てきた結論は、福音を生きるということ、または福音を伝えるということとは、ある種の特別な集団にお任せするべきことではないと。普通の一般庶民、我々一般庶民が——単に食物を食べて生きるのではない——神・キリストの言葉を霊において受けとって、それが我々の存在を支えてくれる根底である、そうあるべきであると。ただどうしても、現実問題としては、我々一般人はいわゆる職業に従事・継続するだけで精一杯で、なかなか合わせて、例えば日曜日に皆さんの前で福音を語るといったことは難しいだろう。そういうことで、ある種のそれに特化した専門集団としての牧師先生方の集まりとというのが出来ざるを得なかったのかなと思う。けれども、それは本来の姿ではない。やっぱり、我々人間は肉体的存在であると同時に霊を持った存在である。神さまは霊に向かつて語りかけてくださる。確かに肉体の病の癒しとか、そういうことを直接お受けして癒されることもありますけれども、本来は

「神は霊であるから、拝する者も霊と真をもつて拝すべきである」

と、キリストは言われたように、霊という存在に対して神さまは語りかけられる。だから、



本来ならば、そういう特別な語り手集団ができるのではなくて、普通の我々一般の人間がいつも神さまの、肉体を超えて霊に語りかけ給う御声を聞いて、その聞いた御声を日曜日を持ち寄って、

「私はこんな御言を聞きました。私に対しては、主さまはこんなふう語りかけてくださったように思っています」

と、そういった霊なる自分が霊なる神さま・キリストとどのような交わりをしてこの一週間を過ごしたか、そのことを各人が持ち寄って、お互いに主を讃美する。そういうのが私の願っていた理想の日曜日の集会だった。だけれども、現実にはやはりもう皆さん、ウィークデイはクタクタになっておられます。ウィークデイはクタクタになっているのに、更に日曜日に来て、

「これをやれ。あれこれしゃべれ」

なんて言われたら、もう救われ難いですよ。だから、そんなことは理念としては成り立つにしても、そこまでのことをお願いするのは止めましょう。ただやはり、証言はしていただきたいから、証言予約制で証言を準備していただくというようなこともやりましたけれども、それもご負担になりそうだというので、それも止めました。だから、今はとても自然な形で、集会を始める時に、

「今日、何か証言したいことのある方はいませんか？」

「はい、あります」

「じゃ、あなた、お願いします」

と。そういう形にした。

「いやはや、日曜日に出てきてまで証言させられたら、もうたまらんわ」

と、そうならないように、そういう形で今、日曜日はやっておりますけれども、私の願いとしては、

「宗教とかキリスト教とかいうのは、特別な人たちの特別なものではない。我々普通の人間が生きていく上でなくてはならないものである。これだけは知ってほしい」

ということ。そして、そのことを集会のお一人お一人が本当に自分の生活の中で確立していつていただきたい。キリストは、

「一、二人わが名において集うところに我もあるなり」

「小さき群れよ、恐れるな。あなた方に御国を賜うことは父の御意なり」と仰った。つまり、いと小さき者を顧み給うものがキリストさまなんです。

「すべて労する者、重荷を負う者、我にきたれ。我なんじらを休ません」

と、言ってくださったでしょ。キリストも本当に重い重荷を負うような苦勞をなされた。

「一緒に軛を負おうではないか」



と言って、いつもキリストの方から近づいて来てくださっている。そういうお方を、何か祀り上げて、何か特別な人が特別にキリストのことを深く受けとって、それをそうでない一般庶民に対して、

「われ汝らに告ぐ……」

なんて言って語り伝える、そういうことではないはずだ。人間は生きていく以上、みな肉体を養っていただく食物と同じように、その霊を養っていただく神・キリストの御言なくしては、人間ではありえない。ただ、一般の人はどうしても、肉体を養うことでもう精一杯だから、なかなか霊の食物を自分の方で進んでいただき、それを更に人々に分かち与えるという、そこまでの余裕はないだろう。そうするとやはり、日曜日にはそれを引き受けて立つ人間も必要だろう。そういうところから、止むなく、そういう日曜日に語る、いわゆる牧師とか伝道者とかいう方々が出来上がったのだらうと、今は思っています。ただ、気をつけなくてはいけないのは、今度そういうグループが出来上がったら、その人たちと一般の人たちとの間にギャップができてしまう。一般の人が見たら、

「なんだ、あの牧師先生方は。我々が汗水たらして必死になって働いている苦しみ、納期限に間に合わせるために二晩三晩徹夜でもして、やっとこき品物を納める、そういうご苦労はまず御存知ないわね!？」

というような形で、神の言葉を伝える方々の立場と一般庶民との間に、ある種のギャップが生じて、極端に言えば相互不信になります。つまり、牧師にすれば、

「神さまに委ねたら、すべてがうまくいくのに、なぜそんなに苦しんでいるの？ そんなに苦しんでいるのは、本当はまだ信じていないからでしょ!？」

みたいな批判的な目で見ないとも限らない。また片一方からすると、

「まあ牧師さんというのはいいよね。いつもそのことだけをやっていたらいいんだもの。我々庶民の苦しみなんでまず御存知ないよね!？」

と。こういうギャップができたら、これはもう語る者と一般庶民の関係は成り立たないですよ。どんなに牧師が一生懸命に語っても、話半分しか聞かないでしょうね。また、牧師は牧師で、

「一般庶民は、これだけ一生懸命に話してもついて来てくれへん。あかんわ」
なんて、そういう相互不信が起こりやすいんです。

それから、気の毒なのは牧師の奥さんですよ。普通の奥さんでありたいのに、

「あれは牧師の奥さんだから」
ということ、特別な目で見ているいろ、それも批判的な目で見ると。

「牧師の奥さんなのに、なんだあれは」
と。そうすると、また気の毒なのはそういう方々です。



●二足草鞋の二刀流

ま、そんなことで、人間社会というのはどういう形であっても問題だらけなんです。そういうなかで、私はどういふことか、本当にこれは自分でも不思議と思うんですけども、そうやって教職に携わりながら、それと合わせて集会を40歳の時から今に至るまで50年続けてこれた。これは並大抵ではないと、今にして思うんです。最大の理由はやはり、妻が協力者であつたということが大きい。家庭を解放して、皆さんを温かく迎え入れた。集会の参加者が言っていましたよ、

「先生だけだつたら近寄りたたいけれども、奥さんがあやつて、『ああ、よう来たね！』と言つて抱きつかれたら、もう離れられないわ」

なんて、何人も仰っていました。それは妻の天性なんです。何か知らないけれども、そういうものを授かつていたんですね。それと妻は非常にお年寄りに対して親切でした。自分のお家にお祖母ちゃんばあが居たということもあります。88か90歳近くまで生きられたと思いますけれども、とても素晴らしいお祖母ちゃんだった。私はお祖母ちゃんに気に入られた。お祖母ちゃんの所へお友達が来るでしょ。そうしたら、私がちよつと用事があつて行つたら、妻が家に居ない時に、お祖母ちゃんばあは、

「まあ、ここで待つていなはれ」

と言つて待たしてくれて、そこへお祖母ちゃんのお友達が来たら、

「この子はな、八尾高やお〔大阪府立八尾高等学校〕で一番なんや」

と凄く自慢してくれるんです。

「はっ、ありがとうございます」

と言つて、やはりあのお祖母ちゃんに気に入つていただいたというのが凄く嬉しい。私はおばあちゃん方に対して親切になりました。まあ余計なことを言つてすみませんが、

私は片一方で大学の民法学の教授という重責を担つて、それだけで大変にもかかわらず、もう片一方で自宅を拠点にして、ときには京都文化センターという所を会場に借りて、そこで日曜日には福音を語るといふ、そういった二足の草鞋わらじを履く生活をずうつと続けて参りました。しかもそれが今日まで続いたというわけです。

最高裁判所に勤めていたときは、二週間に一遍しか戻れませんでした。そのときにも、私は最高裁判所の事務総長にお願いした。

「私は京都に、お年寄りも含めた祈りの群れをかかえています。私としては派手な伝道をする気はありません。しかしながら、京都にいるそういったお年を召した方々と一緒に祈り合うという機会を捨てるわけにいきません。だから、土曜日に京都へ帰つてよろしいですか。目的はそういうことです。派手な伝道は一切いたしません。しかし、そういうお年寄りの方々をやはり祈りをもつて助けていきたいので、よろしいでしょうか？」



と言ったら、

「ちよつと最高裁判所長官と打合せします。…… いいですよ。どうぞ、どうぞ」

と。それで、初めは毎週と行ったところが、やっぱり最高裁判所は忙しいから、毎週は無理だから、二週間に一回にした。そしたら、その方が、

「毎週でなくてよろしいんですか？」

「いやいや、毎週は無理ですよ」

と（笑）。そんなことで、私はどういう職業に就きましても、大事なものは主イエス・キリストさまなんです。職業も、これを天職としていただいた職業であると、自分に相応ふさわしい職業を賜ったと思うんです。だから、その職業において私はキリストの弟子として職業に携わっている。その姿を通して人々が何かを感じてくれたらいいと思う。法学あるいは裁判の中——裁判官を三年やりましたから——直接に宗教を持ち込むことはいたしません。けれども、人が裁判に携わるのも、あるゆることに携わるのも、人間ですから、その事に携わる人間が本当に神・キリストの霊をいただいて、神・キリストによつて生かされて初めて、その人が授かった天職としての法学にせよ教育にせよ裁判にせよ、そういうものが支えられていくのではないだろうか。つまり、直接にそれが影響を与えるのではなくて、しかし、根っこにあって支えていく、そういう役割をするのが神・キリストとの我々の霊的交わりだと思う。

● 樹木と根つこの話

それを小池先生は樹木の話で表してくださった。

「樹木を見てごらん。立派な杉の木が育っている。ところが実は天に20メートル樹木が伸びていたら、それと同じだけ地中深く根が伸びているはずだ。幅広く枝葉が広がっていたら、それだけ根もまた広がっているはずだ。つまり、宗教の世界と文化文明の世界は、方向は逆だ。見える世界は天に向かつていく。ところが、見えない世界は地中、地球の中心に向かつていく。方向はまるで正反対だけれども、その根つこの見えない所が健やかでなければ、見えている部分も健やかには育たない。直接に宗教とか何とかを文化文明に持ち込むのではない。しかし、文化文明をしつかり支えている根つこは宗教の世界だ。ここで神・キリストとしつかり繋がっていないければ、そういう根つこがない文化文明は必ず滅びていく。」

と言われた。私はこれから中国とかロシアとか、そういう意味の根つこを持たない文化文明がどうなっていくのか、それを注目したいと思いますけれども。

小池先生はそう仰つてくれた。私は本当にありがたかった。つまり、自分のやっている法学とか、そういう見える世界を深く追究していくということと、キリスト教、福音とはどこでどう繋がるのかなと、わからないで困っていた。その時に——そんなことは誰も



教えてくれない——小池先生はそういうった形で、

「見える世界、文化文明の世界と、それから見えない根つこの世界は、方向は逆だ。文化文明は空に向かっていく。ところが、根つこは地球の中心へ向かっていく。まるで方向は反対だ。しかも、根つこの世界は見えない。方向の反対の世界がしつかりしていてこそ、目に見える文化文明の世界も健全な発展を遂げる」

と仰った。

「はっ、そうですか。わかりました。はい」

と言って、本当に私は救われた思いがいたしました。それが年齢にして多分、40歳位の頃だったのではないかなと思います。そういうことが非常に私のその後の支えにもなりました。いわゆる二刀流をやっていく、そういうことについても迷いなく、それに携わることができ印象を持つことができました。

一方でそういったこの世の職業で、しかもそう楽ではない重い仕事に携わりながら、それと合わせて福音伝道を50年続ける、この二刀流というのは本邦初ではないかと私は思う。誰もいないでしょ、そういう人は。裁判官の中にも、また学者さんの中にも信者はいますよ。どこかの教会の一キリスト信徒として教会の礼拝に出席し、そしていろいろそれなりの役割を果たされるといふ方はいらっしゃいます。けれども、私みたいに伝道を表にひっさげて、本当の意味の二刀流をやつてのけるといふのは、これは本邦初ではないかと思う。しかも、専門は法学であつて、キリスト教はずぶの素人なんです。

「どこで学んだか？」

「小池辰雄、小池シュレです。小池学校で学びました」

と。いわゆる私淑ですね、小池学校があるわけではないから。しかし、そういうことで、一方でこの世の職業を人並みに一応全うしてきた。

「あの人は、キリスト教の伝道は熱心だけれども、この世の仕事、この世の職がいまひとつやなあ」

と、これではキリストのなおいれですよ。やつぱり、職業人として立つ以上は、職業人としても一目置かれるような存在でありたい。と同時に、福音の方でも、単なる一信者でなくて、小池辰雄を通して伝えられてきた日本的な本當の福音というものを何としてもこの日本に根付かせたいという思い、この二つが車の両輪といいますか——今、大谷選手の二刀流ということが話題になっていますが〔註：大谷翔平。近代のプロ野球では非常に稀な存在となる、シーズンを通して投手と打者を兼任する選手〕——私はそれを貫くことができました。本當にこれもすべて主キリストの導きのお陰ですし、それを支えてくれた妻幸子のお陰ですし、また皆さん集会の方々をよく私の立場を理解してくださつて、いろんな形でサポートしてくださつた。そういうことだと思います。申し上げたいことは、

「だから自分のやつてきたことはよかつた」



とかいうことを言いたいのではなくて、大事なことは我々は日本において本当に福音を根付かせようとしていることなんです。そのためには、皆さんお一人お一人が自分の存在そのものがキリストを証している、

「自分からキリストを抜いたらゼロなんですよ」

という思いをお持ちになることです。

「われ主と共に十字架に付けられたり。もはや、われ生くるにあらず、復活の

キリスト、御霊のキリスト、わがうちにありて生き給うなり」

という、ガラテヤ書2章20節の御言のとおり。これが皆さんお一人お一人の信仰告白であるはずです。

タンポポは地に植えられている時は動けない。ところが、枯れて白い花(綿毛の種子)になりますと、風に吹かれて飛んでいく。岩の割れ目であろうとどこであろうと、そこに根をおろすとそこでまたタンポポの花を咲かす。あの生命力は凄いですね。私は、皆さんお一人お一人がキリストのタンポポの花であると思う。自分の居場所は居場所として、そこに根をおろしながら、同時にどこへでも飛んでいって、すさま隙間があればそこに根をおろして、そこでキリストの花を咲かせる。そういう存在に皆さんお一人お一人が、すでにキリストによってされているんです。

●奥田無きあと京都キリスト召団はどのようにして立って行くのか

「キリスト召団」——小池先生が始められたキリスト召団——の特質はそこなんです。誰も専門家がない。小池先生は半ば専門家です。けれども、先生は元々ドイツ文学、ドイツ宗教学の方がご専門で、いわゆる神学とかのご専門ではなかった。けれども、本当のところをいうと、普通の専門家よりも深いです。深いけれども、いわゆる専門として神学とかをやられたわけではなかった。しかし、あれだけの深さ広さをもって伝道してくださった。これは本当に我々にとっては有り難いことです。しかも、先生が言われたのは、

「二人一召団の気構えで行ってくれ」

と言われた。一人一召団という。あの頃は東京召団がありました。その他、京都、裾野、それから奈良に召団を作ろうとか言われて、弘野君が

「いや、しんどい」

とか言ってやりましたけれども。四国がありました。岡山にも何かできてきました。それから、鹿兒島まで。

「いや、鹿兒島は無理ですよ」

「何ですか?」

「鹿兒島にはお爺さん一人しかおらんやないか」

「いや、一人一召団だ」



と。何せね、先生というのは見栄っ張りなんです。十二召団を作りたかったんです。「12」というのは聖なる数でしょ。だから、十二召団〔東京、京都、大阪、埼玉、裾野、奈良、栃木、岡山、札幌、鹿児島、信州、四国〕を作る。鹿児島のお爺さんなんか一人で大変なのに、とにかく十二作ってご満足でしたけれども。でもやつぱり、言うては悪いけれども、いい加減に作ったものはいい加減につぶれますね。それだけの自覚がないもの

大事なことは今、小池先生が天に召されたあと、東京キリスト召団新宿集会是しつかり先生のあとを守って今も集会を続けておられます。私は一つ申し上げたいことがある。奥田無きあと京都キリスト召団はどのようにして立つて行くのかと。私にとって一番辛いのは、

「先生がいない京都召団は意味がないから、自分は別のどこかの教会へ行きます」

と。これが私にとつて一番辛いことです。そういう選択をなさっても、止めることはできません。けれども、何か縁があつて、ということとは導きがあつて、京都キリスト召団に連なることになられた以上は、そのいわば導き手であつた奥田がたとえ^{たお}仆れても——天に召されることが仆れることとは限りません——天に召されなくても、私がいろんな健康上の理由とか、そういった身体上の理由で集会を導くことができなくなつたということが起こるかも知れません——奥田が講筵者としての立場から去つたとしても、

「自分はせつかく京都召団に導かれた。ここにやはりキリストの導きがあつた。だから、私はどんなことがあつても、京都召団を盛り立てて、京都召団を守つていきますよ」

「あんた、しゃべれるの?」

「いや、しゃべれない。しゃべれないけれども、先生のビデオがある、本がある、いろんなものがある。そういうものを題材にして、そこで日曜毎に集まつて、輪読するとか、証^{あかし}をし合うとか、テープを聞くとか、いろんなことで日曜毎に集まることができはるはずだ」

と。そこで祈りの火を燃やす、絶やささない。新しい人が来たら、引っぱりこんでくる。そして、書き残した著書もある。いろいろある。そういうことをベースにしながらかつていく。この京都キリスト召団は奥田が建てたのではない。キリストが建て給うた召団である。これは妻がハッキリ言つてました。

「京都キリスト召団は人間が建てたものではありません。主さま、あなたがお建てくださった聖なる召団であります。あなたが建ててくださった以上は、あなたがお守りくださいます」

と、常にそうやって祈つてくれていました。

今の集会所ができたのも妻のお陰なんです。初め持ち主は別の方に売ろうと思つておられた。ところが、妻がその持ち主の方の奥さんとご懇意だったので、そこで無理にお願い



して、他にいい値段で売れることになっていたけれども、それを敢えて引っくり返して、あそこを我々が買い取ることができるようになった。それも幸子のお陰だった。だから、あそこは本来、「幸子記念館」という名前を付けてもいいような、そういう経緯で賜ったと思う。でも、今から言えば、我々京都キリスト召団は、あそこに集会所を、土地建物を持っているというのは非常に大きなことですよ。

というのは、信仰は心の問題かもしれない。お祈りもどこでも祈れる。しかし、地上で人間が生きている以上、集まる場所がほしい。地上で生きている人間に大事なものは、集まる場所とお墓です。アブラハムの時から墓がちゃんとあるでしょ、キリスト教の方だって。東京にもちゃんと素晴らしい小池先生のお墓がある。「パラダイソ」「墓碑銘 PARADISO 天国、樂園」という素晴らしいお墓があつて、春になると東京キリスト召団新宿集会の方々がそこ「東西多摩霊園」へ集まつて、そこで集会なさつたりします。ただ、私から言わせたら、やはり「召団」と名乗る以上は、召団としてのお墓を作つていただきたいかった。これは私の願望なんです。京都の方は、奥田昌道個人のものは何もありません。でも、京都キリスト召団の墓地はちゃんと作つてあります「京都西山霊園」。そこに妻も、孫の翔しょうも眠つています。そこで時々集会所を、祈り会をやつたりします。やはり、我々地上に生きている人間としては、集会所する場所とそれからお墓、この二つはなくてはならないものだとは心得ております。

ある時、小池先生は

「お墓なんかどうでもいいよ」

と仰つたけれども、でも、ご自分はある立派な「パラダイソ」をお持ちなんだから。でも、東京キリスト召団としてのお墓はないでしょ。私から言わせたら、先生は「召団」と名乗る以上は、やはり召団本位でいろんなことをやつていただきたいかった。それは私の「こうして欲しかった」という願望なんです。やはり先生はもともと無教会の出身ですから、どうしても個人という面が強く出てきました。だから、召団が団体だと言っても、やはり何か根っこは個人なんです。まあ本来、信仰は個人ですけれども。

しかし、私は「召団」と言つた以上は召団で貫こうという気持ちがあります。だから、今の集会所も法人化しました。法人化するということは、奥田昌道個人とは関係ない。「一般財団法人京都キリスト召団」という名前で登記もしてあります。土地建物共にそういう「一般財団法人 京都キリスト召団」の所有物です。財団法人であるから、やはりそこには理事だとか何だとか、役職をそろえておかないといけない。そういう、形の上で整えること、これは森さん以下、錦織さん、法律家がたくさんいらつしやいますから、よろしくお願ひしたいけれども。そうやつて一応、手続きだけはこの地上の法律に則つてやつておけば、未来永劫、奥田昌道個人の存否にかかわらず、それが続いていくわけです。そういうことだけは、しっかり私はやつておきました。だから、お墓もやつてあります。普通の社会で最も大事にされている、集まる場所とお墓、これはちゃんともう保証されています。だから、



「どうぞ皆さん、どこかの教会へ行くなら、京都キリスト召団へいらつしやいな」
 「奥田昌道は居るの?」

「いや、あれはもう居りませんけれども」

なんて、まあ冗談ですけれども。私は本当に皆さんお一人お一人が——小池先生が、

「二人一召団の気構えでやってほしい」

と言われたその独立心です——そういう独立心を持つていく。それは同時にキリストオンリーです。人間の独立ではない。キリストだけに頼つていく。そういうふうにして、キリストにおんぶしていただいて、貫いていく。これが本来の信仰の在り方だと思う。

●聖霊のパプテスマ

今日の講筵は、『主キリストの賜う「信」に生きる』というタイトルを掲げました。この「信」というのは——鍵括弧を付けてありますけれども——人間が

「自分は信仰があります」

と言う時に使つたりする。いやあ、よくクリスチャンの人が言うんですよ、

「私には信仰がありますからね」

と。私はああいう話を聞くのが大嫌いです。「私には信仰がある」と言う。それはそうかも知らん。けれども、それは賜りたる信たまわなんです。自分が作りだした信ではない。すべて賜りたるものなんです。

今日のタイトルは「主キリストの賜う信」と書いた。人間なんていうのは不信仰そのものですよ。「信仰」なんて言わないでも、人間は本来、生きていく以上は神・キリストなくしては生きておれない。そういう存在のほゞです。それがいつのまにか、神・キリストはどこかへふっ飛ばされて、そして、自分本位で生きていく。自分本位で生きていけなくなつたら、神・キリストを呼びまつる。大体、クリスチャンが持っている信仰というのは、自分が信仰の主体であつて、その自分が神・キリストを呼びこんで、そして自分が困つたら、

「神・キリストよ、助けてくれ!」

と言う。自分で行けるときは、

「はい、結構です。自分でやって行きますから」

と。これは本来の信ではないですよ。これは自分が神さまを召使めしつかいにして扱っているだけなんです。自分のための信仰でしょ。自分が元気で健やかに楽しく生きていく、できれば人にも親切にする、そういうことを自分が願つている。そうありたい姿を貫くために、

「神さま・キリストさま、助けてください。でも、自分でやっていける限りは必要

ありませんからね」

と。こういうのが多いのではないのでしょうか。クリスチャンが、

「私には信仰がありますから」



と、胸を張るような方が、えてしてそのような自己本位の信仰、自分の信仰を樹立するために、神・キリストを召使にして扱っている。変な言い方だけでも、そういうのが実は多いのではないかと思う、「私には信仰がありますから」なんていう時には。そうじゃないです。

私が申したいのは、

「我々の全存在は神・キリストに支えられて初めて在り得る」

ということ。神・キリスト無くしては、自分は在り得ない。霊的存在としてはもちろんです。肉体的な存在にしても、神・キリストの恵みなくして在り得ないはず。人が気付くかどうかは別として。それを私は本来の姿だと思っている。

大体、聖書では、

「**原始に神、天地を創造り給えり**」（創世記1:1）

と。いつも「初め」に神さまが出てきます。ヨハネ伝の始めに、

「**太初に言あり**」（ヨハネ1:1）

とある。全部、神さまの御業が先にあつて、すべてが整ってから人間をお創りになる。あの天地創造でもそうでしょう。最後に人間をお創りになったわけですね。

そのようにして、この我々という人間存在そのものが霊的存在としても、あるいは肉体的存在としても、すべて神・キリストによつて初めて支えられ、生かされているということ。これがまず根本です。普通の人はその根本がわかっていない。わかっている人も、

「自分には信仰がありますから、それでこうなんです」

と、自分の信仰をサムシング（何ものか）にしている。そういうのが多い。それに対して、小池先生は何と仰ったか。

「ゼロだ、無だよ」

と。小池先生はあのマタイ伝5章3節の、

「**幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり**」

という、あそこで本当に躓き、そしてその次には、大発見をなさったわけですね。

「**幸いなるかな、霊の貧しき者**」

という。ところが、人間は霊が貧しくなれない。キリストは霊が貧しかった。神さまが切だった。ご自分はゼロだ。ゼロであるご自分の中に神さまが100%宿られた。それが

「**幸いなるかな、霊の貧しき者。天国、即ち神さまがその人のもの、わがうちにあり**」

と。だから、あの

「『幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり』というのはキリスト

ご自身の霊的告白、信仰告白である」

と言う。キリストにおいては、ご自分が「0」、父なる神さまが「100」です。

「幸いだよ、自分がゼロにされている。そしたら、神さまという100%が入ってきた。」



神さまが入ってきたら、天国はその人のものなり。神さまという天国が入ってきたと。だから、

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

と、あれはキリストだから言えた。ところが、小池先生はそこで苦しんだ。何を苦しんだか。

「自分はゼロになれない」

と、苦しんだ。

「ゼロ・イコール・無限大」(0=∞)

という。ゼロになればいい。ところが、先生はゼロになれない。自我というものが邪魔している。我^がというやつが邪魔している。そこで苦しまれた。その時に先生が祈りの中でいだだかれた御言は、

「幸いなるかな、わが十字架において既に霊貧しくされている辰雄よ、聖霊の我な

んじのうちにあり」

と、こう響いてきたという。そこでもう、「畳の上で平伏した」と、そう仰っています。

先生は顕著な聖霊のバプテスマを二回体験しておられる。一回は阿蘇山で手島郁郎さんと一緒に集会をなさったとき(1950年11月3〜5日)、その最終日に聖霊のバプテスマを受けられた。それが第一回目。それから第二回目は、東京へお帰りになって、今申しましたように——まだ昼日中だと思えますが——そのとき平伏して祈られた時に、

「幸なるかな、わが十字架によりて既に霊貧しくされてある辰雄よ、復活の我、聖

霊の我、なんじのうちにあり」

と響いてきたので、

「自分は畳の上に平伏して本当に涙ぐんだ」

ということを告白なさっています。私が思うにおそらく、二回目の方が深かったのではないかと。つまり、一回目は、とにかく先生にしては、ど肝をぬくような体験なんです。今まで聖霊の世界なんてご存知なかったようなんです。ところが、その時に聖霊に打たれて、先生は坐っている床から何十センチか跳び上がられたらしい。

「跳び上がって、その次の瞬間、ドスンと落ちた」

と、そんなことを言っておられた。そして異言が噴出してきた。そしたら、手島さんが、

「おお、先生、今、それ異言ですよ、異言が出ているんですよ!」

なんて。先生はそれまで「異言」というのは御存知なかったらしい。そういうことで、現象面では阿蘇山での手島郁郎さんとなさった集会で聖霊体験をされた。

それも先生は、しつこく手紙で手島さんから「来てくれ、来てくれ」と言われて、やむを得ず、しぶしぶ行かれた。ところが、やむを得ずしぶしぶ行かれた時に、その集会の最終回において、そういった現象が起こって、先生に聖霊が臨み、そして異言が飛びだした。それから、帰りは九州から東京まで車で10時間以上かかったそうです。ところが、その車の中で



開いた聖書が、

「聖書の文字が踊っている。そんなのは初めての体験だ」

と。文字がピョコピョコ踊っている。それで本当にそれから、いわば御霊が先生にくつついて、いろいろ不思議なことが起こっていった。

脊椎カリエスで2時間も起きていられない人——信州の小諸にいらつしやる女性——その所に先生が伝道に行かれて、そこで2時間位お話になった。普通だったら2時間もお話を聞けないような病弱なお方だったのが、そのお話を聞きになったあと、先生が、

「あんしゅ 按手して祈りたいけれども、いいですか？」

と聞かれた。

「はい、どうぞ、先生、按手して祈ってください」

と。それで先生は按手して祈られたら、何か毒気のようなものがその人から出ていって、それで癒されてしまった。先生自身もびっくりした。そこでその女性は、自分が尊敬していたある無教会の先生へ、

「こういうことがあったんです」

という手紙を書かれた。そしたら、こういう返事が返ってきたか。

「何者にたぶらかされたか!」

という返事であった。つまり、そういう「癒し」とかいふ現象は御法度ごはつとだった。自分が信頼していた先生から「何者にたぶらかされたか」というガラテヤ書の言葉で、

「異端だ!」

と言われたわけです。そのことをまた正直に小池先生に手紙で書かれた。先生は手紙で次のようにご返事された。

「私はキリストに祈っただけだ。私はキリストのなさるままに身を委ねただけだ。

それが、何者にたぶらかされたか云々と仰るなら結構です。自分は自分で何もしていない。キリストが私を通して御業みわざをなされた。そうとしか思えない。だから、

あとはどうぞご自由に」

と、先生はそこでその方と一時、縁を切られた。まあ気の毒なのはその女性ですね。自分の信頼する小池先生に癒していただいて、それでも嬉しくてたまらない。その喜びを自分の信頼するその教派の先生に言ったら、「何者にたぶらかされたか」と、つまり

「異端者にたぶらかされたお前の癒しは偽りである」

と、こつぴどく叱られた。だから、本当にあと苦しまれたらしい。そういった霊の戦いというのは凄いですよ。やはり、そんなことはあつてほしくはないけれども、本当に深い世界に入っていたら、霊と霊との戦いというのは起こるんです。

〔註〕小池辰雄著作集第9巻『感想と紀行』／六、愛そのもの——川口愛子姉——より。

「……ある夜、彼はみ霊に感じて、一夜彼女の病床に侍り、たましいを寵めて祈った。その按手



を通して彼女、はげしき靈動ののち、異言ほとばしってやまず、カリエスは癒された。『先生、身心がすっかり軽くなりました。本当にふしぎでございます。』彼は平伏して、聖名を讃え、感謝した。彼女、無教会信者のゆえに、ある妨害によって、しばし曲折はあったものの、はつきりみ霊の人とはなつた、使徒的信仰の旗じるしのもと。……』

●四つの警戒すべきもの、観念信仰・パリサイ・靈的傲慢・御利益

その霊と霊との戦いのことは、エペソ書6章の後半部に言ってますから、あそこをしつかり受けとってほしい。6章10節から読みます。

「10終に言わん、汝ら主に在りて其の大能の勢威に頼りて強かれ。11悪魔の術に向いて立ち得んために、神の武具をもて鎧うべし。12我らは血肉と戦うにあらず、政治・権威、この世の暗黒を掌どるもの、天の処にある悪の霊と戦うなり。13この故に神の武具を執れ、汝ら悪しき日に遭いて仇に立ちむかい、凡ての事を成就して立ち得んためなり。14汝ら立つに誠を帯として腰に結び、義を胸当として胸に当て、15平安の福音の備を靴として足に穿け。16この他なお信仰の盾をれ、之をもて悪しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。17また救の冑および御霊の剣、すなわち神の言を執れ。18常にさまざまの祈と願とをなし、御霊によりて祈り、また目を覚して凡ての聖徒のためにも願いて倦まざれ。19又わが口を開くとき、言を賜わり、憚らずして福音の奥義を示し、20語るべき所を憚らず語り得るように、我がためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖に繋がれたり。」(エペソ6・10〜20)

この6章10節以下は、私にとつては本当にリアリティ(現実のもの)だと思つています。これが目に見えない本当の霊と霊との戦いの世界だと思つていいる。

先生は、クリスチャンが気をつけるべき四つのことを挙げられたことがあります。一つは観念信仰、つまり頭でつかちの頭だけの信仰。二つ目はパリサイ。己を義として他を審くパリサイ。それからもう一つは靈的傲慢。何か賜りますと、

「俺は立派な者になった。俺は大した者だ」

と、栄光をキリストに帰せることを忘れて、自分が何かいかにも靈的に立派になったようにして己を誇る。それから、御利益。この四つをあげられました。

観念信仰、パリサイ、靈的傲慢、御利益。まことに先生は本当に大事なものをしつかりつかまえられた。およそ宗教家というのはそのどれかを誇つていますよ。いかにも自分が立派なように見せかけたりする。そういうことに対して、先生の言われた警戒すべき四つもの、これもこの機会に、どうぞ覚えておいてください。

そして、今のエペソ書の6章10節以下の所、こういう言葉というのは本当に今の現実の問題としてしつかり受けとりたいですね。



「救の胃かぶとおよび御霊の剣しるみ、すなわち神の言ことばを執とれ。18常にさまざまの祈と願とをなし、御霊によりて祈り、また目を覚して凡ての聖徒のためにも願いて倦うまざれ。」
と。また、パウロは

「自分のためにもしっかりと祈ってほしい」ということを言っています。

今ここに一例を見ただけですけれども、皆さん、聖書をお読みになる時に、これを人ごとと思つて読まないで、自分に語られている言葉、自分がそこで語られていることに何らかの役割を分担していると。これは伝道者だけに任せておくのではない。皆さん、お一人お一人が、皆さんの生活を通してキリストを証あかしなさっているんです。キリストはそれを願つておられる。だから、皆さんが本当にキリストの器としてキリストに用いていただき、キリストに喜んでいただくためには、こういったエペソ書6章なんかは自分に語られた言葉としてしっかりと受けとつてほしい。

たくさんの本を読む必要はありませんよ。読むのなら、小池先生の書かれた本をお読みになったらいい。そして、この新約聖書を本当に自分の血となし肉となすように、自分に語られている言葉として読んでいく。それが大事です。

●人間は肉体的存在であると同時に霊的存在

それから、こういう福音の世界では、素人しろうとも玄人くろうともない。よく私は私たちの集まりを「素人集団」と言いますが、その「素人集団」である私たちは、この世の職業を賜っている。それと並行して福音を語ったり、福音を生きているということを行っている。つまり、私たち「素人集団」は、福音そのものに携わる牧師とか神父という専門家集団ではない。けれども、私から言わせれば、人間は本来、霊的な存在です。霊的存在者としての霊なる人は、神の言葉、神の霊の導きなくしては生きられない存在なんです。肉体は食物、飲み物なくしては生きられません。それから適度の睡眠とか、そういった肉体が必要とするすべてのもの、これをしつかりいただいてこそ肉体は健やかです。と同時に、人間は霊的存在です。神さまと直接繋がるのは霊の次元です。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真まことをもつて拝すべきである」

という。これは「サマリヤの女」に話された。サマリヤの女なんて身持ちが悪くて、お昼にのこの水汲みに来たような人ですよ。ところが、その女と

「この井戸は深いですよ」

なんて井戸水の話からいろいろ話が始まって、あんな素晴らしい話へと展開していった。申し上げたいことは、我々一人ひとりが肉体的存在者であると同時に、霊的存在者であるということ。そして、霊的存在者という点においては、牧師であろうと神父であろうと、



何も変りはない。変りがあつたらおかしい。

ただ、残念ながら、この世においては、福音に専門的に携わらないこの世の職業に従事している人は、職業だけでフラフラになってしまう。これが現実だ。そうするとやはり、特別な方々がそれに専念して、御言を習得し、御言の真理を語り伝えるという役割も必要ではあろう。しかし、本来ならば、そういう役割分担は、私は願わしいとは思っていない。牧師集団だって、我々と同じような肉体を持っている存在なんです。だから、人が人であるかぎり、霊的存在者として、人はみな肉体を養ってくれる食物とかと同じく、霊を養ってくれる御霊・御言、これが不可欠です。

御霊・御言を語る人と、その御霊・御言を受ける人がバラバラであつてほしくはない。やむを得ず、多くの教会では牧師さんという立場の人と、一般信徒という人は別々になっていきますけれども、本来ならば、一本であつてほしい。本来であれば、一般の信徒の中から毎週交代で――月に一回とか、二月に一回でもいい――そういう人が御言を取り次ぎ、役割を担ってくれたら、それでいい。そんな御言を取り次ぐ専門家集団というものは――それはカトリック系では大事でしょうけれども――我々庶民一般の福音の世界では、そういう区別は本来あつてほしくない。これが私の願いです。

私は、忙しいこの世の職業がある――この世の職業だけでも実は本当に大変だったけれども――にもかかわらず、なぜ日曜日に敢えて自分が矢面に立つて、福音伝道の牧師の務めを引き受けてきたかという、これは本来は一本であるべきだという、本来はすべての人が神・キリストによつて生かされている霊的存在者だと考えるからです。霊的存在者は霊の食物、即ち御言・御霊をもつて生かされていく。本来的には牧師集団と一般信徒集団とは分離してほしくない。やむを得ず、今は分離現象が起こっているけれども、それは本来の姿ではないというのが私の根底からの思いなんです。

私は一方でこの世の職業に従事していながら、敢えてそれと並行的に日曜日の集会を引き受けてきた。足りないところがいつぱいあつたでしょう。でも、それをやってきた。それを妻が支え、また集会の皆さんがよく理解して、それをサポートしてくださった。これは世界で珍しい福音伝道の在り方ではないかと思えますよ。大体、一般信徒集団と牧師集団は別れているのが常ですから。どこを向いてもおそろく珍しいのではないのでしょうか。ということは、我々が導かれているのは、新しいことをキリストがさせてくださっているのではないのでしょうか。

しかも、私はずぶの素人ですよ。繰り返しますが、私は、福音の方が専門ではありません。法律学の研究・教育に携わってきた人間ですよ。そういう人間が敢えてこの福音を、矢面に立つて語る、また語らざるを得ないというのは、この福音は万人に共通なものなんです。福音なき人間は人間としての本来の生き方をしていない。そういう気持ちなんです。

人間は肉体的存在であると同時に霊的存在です。肉体的存在としては、この世のいろん



な食物とか、さまざまな物質に養われる。しかし、霊的存在者としての人間の霊を健やかに保ち成長させてくださるのは、霊の食物、つまり御言・御霊です。だから、御言・御霊をしつかりと語ってくれる人、伝えてくれる人がどうしても必要になってしまう。本来なら、この地上の職業に携わっている人が順番に交代交代でその役割を果たせばいいけれども、なかなか現実にはそうもいかない。そこで、ある種の牧師集団的なグループが出来上がったけれども、私はそれは本来の姿だとは思っていない。

人間は本来、霊的存在である。本来、人間は、肉体を持った存在としては、食物とか目に見えるものをもって養われる。同時に霊的存在としては、御言・御霊で養われる。この二つは分離できないものである。だから、御霊・御言だけに仕える特別なグループができるとするのは、本来的な姿としては望ましくないと、そんな思いまで私はするんです。

●外なる人は壊るれども

ということとは、それぞれの皆さんお一人お一人が、それだけの覚悟をもって、神・キリストと取っ組んでほしい。人間はいろいろな趣味があるでしょう、いろんな娯楽もあるでしょう。けれどもやはり、一番大事なのは何かのか。天に通ずるものですよ。この地上の体が去つても、なお続いていくもの。地上の体が壊れても、なおその後に残るもの、それは何かというと、コリント後書4章の所に載ってます。

「地上の体が壊れれば、何か壊れないものがそこに現れてくる」と。16節から、

「¹⁶この故に我らは落膽せず、^{あつた}我らが外なる人は壊るれども、内なる人は日々
に新なり。」

まあこの歳になりますとね、やっぱり外なる人は破れっぱなしですよ、正直言いました。いや恥ずかしい話だけれども、小便漏らしたりなんかおしますしね。そうすると洗濯せんならん。やらねばならんことが増えてくるんです、本当のところ。

「あつやっぱり、外なる人は破れているな」

と、自分で思っている。だから、そういうことで、御言の真実性を私は保証いたします。

「¹⁷それ我らが受くる暫くの軽き患難は、極めて大なる永遠の重き光栄を得し
むるなり。」

「暫くの軽き患難」、それに対して「極めて大なる永遠の重き光栄」、これは比べものにならない。それを頂くんだと。

「¹⁸我らの顧みる所は見ゆるものにあらず見えぬものなればなり。見ゆるものは暫時にして、見えぬものは永遠に至るなり。」(コリント後4・16〜18)

こういう霊的な現実の中に我々は現に生かされています。歳を取ればとるほど、この

「外なる人は壊るれども」



を、これは本当に否が応でも味わざるを得ない。スタスタと歩けないでしょ、杖をつきなからでしか移動ができなくなる。それから、さつき言いましたように、ついつい間に合わなくて漏らしてしまう——秘密を漏らすのではないですよ（笑）——変なものを漏らしてしまう。そういう「外なる人」は本当に破れつぱなしですわ。そうすると、普通なら嘆かわしくて、

「ああ、歳なんて取るものではないな」

と言うかも知らんけれども、私はそうではない。

「おう、こんな破れつぱなしでも、神・キリストは私を用いて、日曜毎に集会で皆さんを元気づける、そういう御用にお用いくださる。ああ、有り難いことだな。また、このような人間をサポートしてくださる方がたくさんいらっしゃる。ああ、有り難いことだな」

と。もう本当に私は、

「有り難い、有り難い」

と思つて生きていますので。そういう意味で、聖書に書かれていることは、皆さん、体験するとよくわかりますよ。本当に体験したことだけがご自分のものになりますから。聖書は飾っておくべき本ではない。本当に体験して、

「あつ、この御言を私は味わいました。これは本当でしたよ」

と。自分が味わったものは、自分の言葉で人にしゃべれます。知識はそれなりの技巧をこらさないと、人に伝わらない。けれども、体験したことは、その証言として告白できるでしょ。そういう意味で、聖書に書かれていることは非常に奥が深いですから、皆さん、それぞれの場において、いろいろ味われたことを

「あつ、聖書に書いてあることはこのことを言っているんだ」

と。そういう形でパウロの言葉なんかを読めば、味わい深いですよ。

「我はこの土の器に宝を持てり」

という。このコリント後書の4章7節に、

「⁷我等この宝を土の器に有てり、これ優れて大なる能力の我等より出でずして、神より出づることの顕れんためなり。」（コリント後4・7）

とある。自分は「土の器」だ。しかし、この土の器に「宝」が入っている。しかもこの宝は人間から出たものではない。神・キリストから出たものだ、と言っている。だから、私なんか、こういうパウロの言葉を讀むと、

「ああ、そうだ、そうだ。ようパウロさんは言ってくれているな。私も同じ気持ちですよ。もしパウロさんが現れたら抱きつきたいな」

と、そんな気持ちなんです。皆さんも、聖書をお読みになる時に、

「聖書は自分の身体の一部である。人生そのものである」



と、そういう思いで読み、聖書と一如一体となつて生きていただきたいなと思います。

●われ主と共に十字架せられたり

まあまあとにかく、何をしゃべったのか、導かれるままにしゃべってきました。繰り返しますが、大事なことをもう一度まとめとして申しますと、私は法律学者、法律研究家——民法ですね——その研究家としてそれをいわゆる天職としてこの世の仕事にしています。小池先生は「天賦天職」と仰つてくださった。それを欧米の言葉では「コーリング」(calling)、「ベルーフ」(Beruf)と言いますね、「呼ぶ」ということ。つまり天賦天職です。この世の仕事、職業というのは主に在つてそれに導かれていくならば、それは天賦天職としてそれ自体、非常に尊ぶべきものです。天賦天職というのはどちらかというと、人間の見える部分、体、頭脳、そういった人間の見える部分を最大限生かして携わる領域です。同時にそれを超えて、人間が霊的存在であることも間違いない。

しかし、霊は——自分でも霊はどこにあるかわからない——私にとって不思議なのは、「人間がオギヤーと生まれてくる時にいつ、霊がその人の中に入るのだろうか？」ということなんです。

「胎児の時に霊が入っているのだろうか。いやそんなことはあるまい。では、いつ、霊が入るんだろうか？」
なんて思ったことがある。わからないです。

けれども、人間は単に肉体的存在であるにとどまらず、霊を授かった存在である。しかも、霊は自分でプロデュース(作り出す、生み出す)したものではない。親がプロデュースしたものでない。神・キリストから、神さまの側から授かったものが霊である。その霊に対して、神・キリストは語りかけ給う。

「神は霊であるから、拝する者も霊と真をもつて拝すべきである」(ヨハネ 4・24)

と。それから、キリストはまたヨハネ伝6章63節以下で、

「生かすものは霊であつて、肉は役立たない。私が語つた言は霊であり、生命である」(ヨハネ6・63)

と言つておられます。ついでに申しますと、そういうことをキリストが仰つたら、それまでキリストを先生と仰いで従いてきた者が躓いた。そして多くの人が去つて行った。キリストはペテロに聞かれた。

「あなたも去ろうとするのか？」

「いえ、私は絶対にあなたを離れない。あなたをおいて他に神の言を語つてくださる方はどこにもありませんから」

とペテロは答えた。やはりペテロはそういうところは凄いですよ。



私たちは、この聖書に書かれていることを全部、霊的存在としての私たち人間に対して、霊なる神さまが霊なる言葉として語りかけておられる霊言として、受けとつていかなければなりません。それには平伏しの心が大事です。いつも平伏していることが大事です。傲慢なところには神の霊は宿りません。だから、いつも平伏していることです。それと十字架です。

十字架で我々は罪・咎^{とが}を贖われ、御言を受けるに相応^{ふさわ}しい霊的存在にされたんです。その十字架を土台にして、そこで一切、罪・咎を払い除けていただいた。そういうところに霊なる神さまが霊なる言葉をもつて語りかけ、導き給う。

どなたも例外なしです。キリストの十字架で贖われない罪は一つもない。キリストは全部、我々を贖った。根底から「新しき人」として、霊的存在としてつくりだしてくださいました。その新しい霊的存在者に対して、神さまが霊の言葉をもつて語りかけ給う。そこで平伏して、それを聴いていく。そういう、霊の次元のものは霊をもつて受けとらなければいけない。そういう当然のことを、皆さん、ぜひ心得ていただいて、神・キリストに祈る時には、

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず、復活のキリスト、御霊のキリストが新しく賜ったわがうちにありて生き給うなり。ありがとうございませぬ。この新しくせられた自分に対して、主よ、どうぞ語りかけてください。しもべは平伏して聴きますから」

という、平伏しの心で御言・御霊を聴く。そういう生活を、一日の中で15分でもいいですから、たった一人の時間をお持ちいただきたい。

私は否応なしにひとりの時間が多いんですけれども、皆さんは、どうしても、いろいろな方との付き合いもあります。ご家族もいらつしやる。そういうことで、なかなか一人切りになりにくいかもしれないけれども、本当に神・キリストと霊的な交流をするには、そうやって一人だけの時間をつくつて、そこで深く祈って、そして、平伏し感謝する。

「自分には何もありませんから」

と、これが大事です。神・キリストが一切なんです。

「わが願い」でもない。わが願いで「こうしてくれ」と言ったら、神さまが召使でしょ。私はこうしてほしい。だから、してよね」

と言って、こつちが主人公で、神・キリストがこつちの言いなりになっている。おかしいでしょ。だから、我々が神・キリストの前に出る時には、平伏^{ひれふ}し、こつちはゼロです、ナッシング（無）です。むしろ、罪・咎^{とが}のあるマイナスです。けれども、罪・咎のあるマイナスな、ナッシング（無）なこの自分に対して、

「主さま、どうぞ、あなたが百分、御意のままに臨んでください。平伏して聴きます。つります。どうぞ、お語りください。御霊の主よ、働きかけてください」

と。これが平伏しの心、砕けの心です。そういう心で主さまの前に出る。その時には家族



も誰もいない方がいい。いや、本当にクリスチャンホームで一緒に祈れるなら、それもいいですよ。そうでなければ、自分だけの時間を20分間持つて、そこで本当に霊なる神・キリストが霊なる自分に対して働きかけてくださる。

「その御言を聴かせてください」
と祈ることです。

●詩篇103篇と139篇

私が聴きます御言、これは本当に語りかけられているのか、私にはわからないんです。私にはいつも聖書の言葉が浮かんでくる。聖書の言葉がすごく迫ってくる。

「あつ、この御言、ありがとございます！」

と。それは新約聖書が主ですけれども、詩篇もあります。特に詩篇の139篇と103篇、これなんか素晴らしい。103篇は、

「わが靈魂よ、主をほめよ」

というところです。139篇は、

「エホバよなんじは我をさぐり 我をしりたまえり 2なんじはわが坐るをも立つをもしり又とおくよりわが念をわきまえたもう 3なんじはわが歩むをもわが臥すをもさぐりいだしわがもろもろの途をことごとく知りたまえり 4そはわが舌に一言ありとも 観よエホバよなんじことごとく知りたもう 5なんじは前より後よりわれをかこみ わが上にその手をおき給えり」(詩篇139・1〜5)

「あなたは私が立つのも坐るのも全部ご存知です。何から何まで隅から隅まであなたは私のことを知りつくしておられます。私がまだ地上に生まれる前からあなたは知りつくしてくださいました」

という、自分の今現在、生い立ち、それをことごとくご存知で、私をお創りくださいましたという、それへの感謝が詩篇139篇です。

そして103篇というのは、

「わが靈魂よ エホバをほめまつれ わが衷なるすべてのものよそのきよき名をほめまつれ 2わがたましひよエホバを讃めまつれそのすべての恩恵をわするるなかれ 3エホバはなんじがすべての不義をゆるし汝のすべての疾をいやし 4なんじの生命をほろびより贖いだし 仁慈と憐憫とを汝にかうぶらせ 5なんじの口を嘉物にてあかしめたもう 斯てなんじは壮きて驚のごとく新になるなり……」(詩篇103・1〜5)

「わが魂よ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なる御名をほめよ。……汝のすべての罪を贖い」



という、福音のエッセンスが語られているのが詩篇103篇です。ですから、139篇は、神さまが自分をどのように扱ってくださったかということに対する感謝。103篇は、そのようにして新しくされた、福音の中に生かされている自分というものがいかなる存在かを理解し、それを感謝して讃美する。これが103篇。だから、この二つをしっかりと覚えてください。

小池先生は、

「詩篇23篇は美しい。わが人生の歌である」

と言って、愛読された。それは23篇は美しいですよ。でも、私からしたら、あれは美しすぎるから後で味わってもいいと。生の自分^{なま}を本当につかまえて支えてくれているのが139篇、そのようにして支えられ生かされた自分が神を讃美するのが103篇である。そんなふうな位置づけをしている。その他、詩篇には素晴らしいものがいっぱいあります。だから、そういった詩篇の中の、

「これぞわが告白!」

というものをつかえ、それをご自分の祈りの時の言葉とし、歌となさったら、よろしいかと思えます。

いよいよ、いろいろしゃべっているうちに、もう時間がきてしまいました。本当に、皆さん、よく集まってくれ、感謝いたします。

● 祈り

では、ひとことお祈りして、終わりいたします。

主さま、ありがとうございます。すべてを備えてくださった主さま、ありがとうございます。本当に主さま、我々の知らないところで、あなたは根底から我々を支えてくださり、罪深い我らをあなたの十字架ですっかり罪無き者としてくださいました。あなたはマイナスを全部ひつかぶって、私たちにプラスを、無限無量のプラスを与えてくださいました。

「われ生くれば、汝も生くべし」

と、あなたはヨハネ伝で語ってくださいています。

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり。葡萄樹と葡萄の枝、これは切っても切れない繋がりがあるんだよ」

と言ってくださいました。本当に主さま、棄身のあなたのご愛を本当に全存在をもって感謝して讃美し奉ります。

第一回の集会をこのように導いてくださったことをここに感謝し、皆さまの祈りと共に御名を讃美しつつ、御前にお捧げいたします。アーメン。

